



TITLE:

会議 図書館商議会専門委員会 第
9,10,11回 昭和45年度全国図書館大
会

AUTHOR(S):

CITATION:

会議 図書館商議会専門委員会 第9,10,11回 昭和45年度全国図書館大会.
静脩 1971, 7(5): 5-5

ISSUE DATE:

1971-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36627>

RIGHT:

 議 会

図 書 館 商 議 会 専 門 委 員 会

第9回 昭和45年10月21日 第10回 昭和45年11月25日
 第11回 昭和45年12月23日

〔第9回〕 テーマ：附属図書館と保存図書館

昭和45年10月末現在で、京都大学の蔵書数は290万冊を越える。それに対して、本学における書庫の収容可能数（書架棚板の長さ90cmに図書25冊を収容可能として計算）は、286万冊余で、全体としては、すでに4万冊近い未収容図書があることになっている。このような、収容可能数の赤字・黒字は、部局によって、それぞれ違いがあるが、大学全体として、早急に保存図書館の計画をすすめる必要がある。

その場合、保存図書館を別個に建てるか、それとも、中央館を新築して、現在の中央館の建物を保存図書館として使用するかについて審議が行なわれた。

〔第10・11回〕 テーマ：学内における図書館長の地位

これまで、附属図書館や部局図書館のあり方、大学全体としての図書館システムの問題等の討議を続けてきたが、今回からは、図書館長の問題の討議に入ることになった。

問題点としては、図書館長と評議会の関係、図書館長と商議会との関係、さらには、商議会と総長および評議会との関係等を、どのように考えるべきかについて審議された。

とくに、商議会のあり方については、他大学の事例をみても、かなりまちまちであり、また、館長を自動的に評議員とすべきかどうかについても、評議会のあり方とも関連して、各大学ごとに取扱い方が違っている。京都大学の図書館行政という観点から考えた場合、どうあるべきかについて、つき込んだ意見がいろいろ出されたが、行政組織等に関する学内の専門家の意見も聞き、さらに審議を続けることになった。

昭 和 4 5 年 度 全 国 図 書 館 大 会

＜とき：昭和45年11月11日（水）～13日（金）　ところ：広島市＞

本年は図書館法施行20周年でもあり、「協力体制の確立」と「社会との結びつきを強めよう」という大会スローガンのもとに、全国各地の図書館人、および社会教育関係者、図書館利用者を集めて、盛大な幕開けとなった。

初日は開会式や記念講演（升田幸三氏：人生雑感）があり、2日目は、館種別、問題別の15の部会に分れて、終日熱心な討議が行なわれた。

大学図書館の部会は、広島大学会館を会場として開かれたが、午前中は共通テーマ「大学図書館改革の基本問題」をめぐり、国立・私立から報告があり、討論が行なわれた。午後は「図書館業務の機械化」の問題について、報告・討論があり、その他沖縄の大学図書館に対する本土大学図書館の協力の要請（琉球大学）や、アメリカにおける大学図書館の問題点について、ハワイ大学の鈴木幸久氏より報告があった。

第3日目は、各部会での討議のうち、諸方面に要望すべき事項を全体会議で討議し、7項目の要望が採択されて大会を終了した。

 ニ ュ ー ス

附属図書館に“業務機械化作業グループ”を設置

さる8月中旬より開かれていた“フォートラン”の研修会が終ったので、このほど、これ